

# 石川県埋蔵文化財情報

## 第 48 号

巻頭図版（一針C遺跡 倉垣遺跡 宅田上野山遺跡）

令和4年度上半期の発掘調査から ..... 部長 土屋宣雄 … (1)

### 発掘調査略報

一針C遺跡（小松市） ..... (2)

倉垣遺跡（志賀町） ..... (4)

宅田上野山遺跡（輪島市） ..... (6)

令和4年度上半期の出土品整理作業 ..... (8)

### 調査研究報告

小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧について ..... 森 貴教・林 大智 … (11)

石川県内の琥珀と翡翠について ..... 久田正弘 … (19)

2023年3月

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター



## 写真解説

### 一針 C 遺跡

#### 調査地遠景（梯川中流域から日本海を望む）（南東から）

一針 C 遺跡は、小松市北部を流れる梯川右岸の中流域に位置する、弥生時代から中世の集落遺跡である。梯川の改修工事に伴い、平成 25 年度から発掘調査を行っている。

令和 4 年度の春期の調査では、上流側の P2 区下層・最下層および下流側の R・S 区中層を調査した。P2 区下層では、弥生時代後期～平安時代に流れていた梯川の旧流路と、流路下部の最下層で弥生時代中期の集落を囲んでいた環濠の一部を確認した。流路や環濠からは、土器や砥石などが出土した。

#### 調査区（R・S 区中層）全景（南東から）

R・S 区中層では、蛇行しながら流れていた梯川の旧流路沿いに弥生時代～平安時代の集落跡を確認し、流路埋没後の面には、複数の中世の井戸を検出した。

各調査区からは、弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器をはじめ、中世の土師器や加賀焼・越前焼・珠洲焼・青磁・白磁などの陶磁器、土錘や円盤状陶製品などの土製品・陶製品、行火・石臼などの石製品、曲物や網杵とみられる木製品、漆器椀、鉄滓などの多彩な遺物が出土した。



調査地遠景（梯川中流域から日本海を望む）（南東から）



調査区（R・S区中層）全景（南東から）

## 写真解説

### 倉垣遺跡

#### 調査区遠景（北北東から）

志賀町南東部、のと里山海道西山インターチェンジ近くに位置し、安津見川左岸の丘陵から平野部に立地する遺跡である。

古墳時代～平安時代の竪穴建物・掘立柱建物と古墳時代の川跡を検出した。川跡からは、古墳時代中・後期の土師器と須恵器が多量に出土した。

#### 竪穴建物・掘立柱建物（南東から）

調査区の北側では、古墳時代と思われる竪穴建物4棟、平安時代と思われる掘立柱建物1棟を検出した。



調査区遠景（北北東から）



竪穴建物・掘立柱建物（南東から）

## 写真解説

### 宅田上野山遺跡

#### 調査地遠景（南から）

河原田川と鳳至川に挟まれた台地上に位置し、北方には輪島市街地さらに輪島港を望む。調査区の中央には縄文時代後期から古代の遺物が多く出土した谷部、西側には古代の側柱式掘立柱建物群や焼成土坑などの古代の集落、東側には総柱式や側柱式の掘立柱建物群など古代の集落や幕末の「輪島在住」の役屋敷との関係がうかがえる掘立柱建物群が見つかった。

#### 谷部から出土した縄文土器（北から）

谷部東斜面から底面では、無数の礫が見つかった。礫は、河原田川や海岸などで採取したものと思われる。これらには磨製石斧やその未成品であったり、土偶や石冠などの呪術具、剥片、被熱礫、焼骨、土器片などが混じっていた。このことから石器の製作場や祭祀の場である可能性が高い。これら礫群の上には縄文時代後期末葉の八日市新保式土器がぶれてみつかっており、礫群の構築はそれ以前と考えられる。

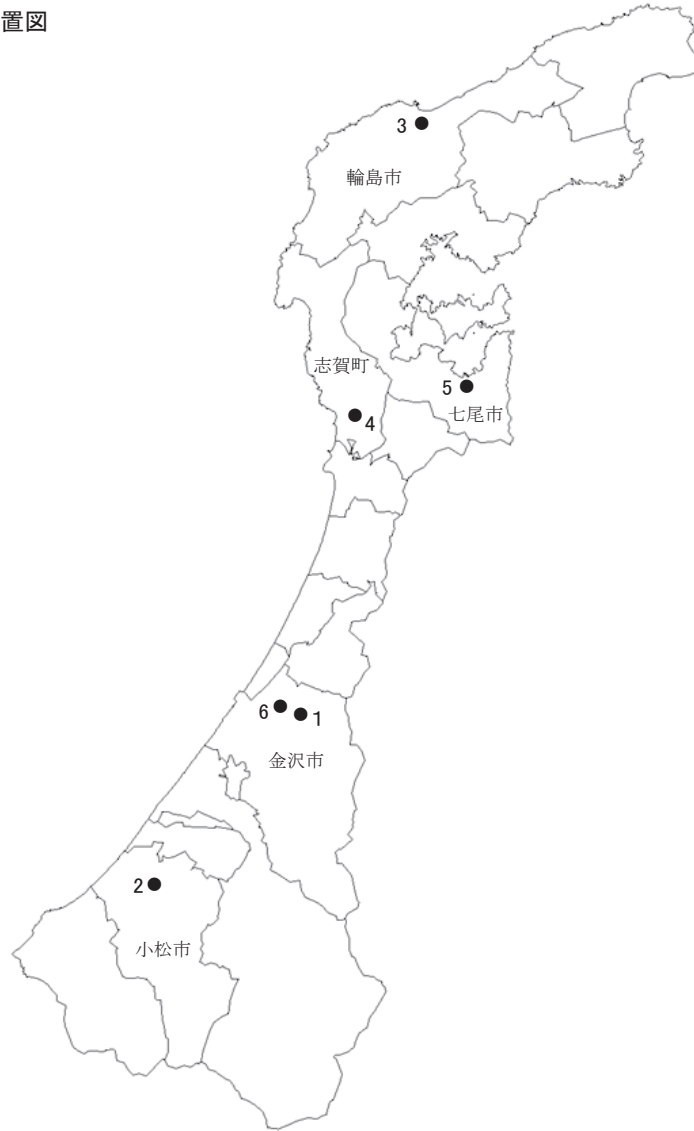


調査地遠景（南から）



谷部礫群上部から出土した縄文土器（北から）

令和4年度 発掘調査遺跡位置図



令和4年度発掘調査遺跡一覧

No.	掲載遺跡	遺跡名	所在地	調査面積(m <sup>2</sup> )	時代	関係機関	関係事業
1		観法寺墳墓群	金沢市観法寺町	1,770	弥生～中世	国土交通省	一般国道159号改築 (金沢東部環状道路)
2	○	一針C遺跡	小松市一針町	3,570	弥生～中世		梯川河川改修
3	○	宅田上野山遺跡	輪島市宅田町	2,800	縄文、古代、近世	県土木部	国道改築一般国道249号 (輪島バイパス)
4	○	倉垣遺跡	志賀町倉垣	480	弥生～古代		一般県道羽咋田鶴浜線
5		矢田遺跡	七尾市矢田町	2,370	弥生～中世		七尾外環状線 街路整備
6		大場遺跡	金沢市大場町	4,940	古墳～中世	県教育委員会	いしかわ特別支援学校整備
	3件	6件		15,930			

# 令和4年度上半期の発掘調査から

部長 土屋宣雄

令和4年度は、石川県教育委員会から6件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの調査件数は、国土交通省2件、県土木部3件、県教育委員会1件となる。本号においては、主に上半期に発掘調査を実施した3遺跡の概要を紹介する。

一針C遺跡（小松市）は、梯川河川改修に伴い、平成25年度（2013）から調査に着手し、今年度は第9次調査となる。今回は、4～6月に実施した春期調査（1,790㎡）の概要を紹介する。

本遺跡は、梯川中流域右岸に位置し、同河川の氾濫などによる土壌堆積等により、複数の調査面を確認した弥生時代～中世の複合遺跡である。今回は、3ヶ所の調査区を設定し、梯川の旧流路（弥生時代後期～古代）や弥生時代中期の集落を囲んでいた環濠の一部を確認した他、弥生時代～中世の掘立柱建物や井戸、土坑などを検出し、土器・陶磁器や管玉未成品・砥石・行火・石臼等の石製品、曲物や網杵等の木製品が出土している。

また、弥生時代の土坑からは緑色凝灰岩製の管玉未成品等が出土していることから、集落内での玉づくりの存在が明らかとなった他、中世の井戸の中には、結桶の井戸杵をもつものも確認されている。なお、今年度は、秋期調査（10～12月）も計画しており、その調査概要は、次号に掲載予定である。

宅田上野山遺跡（輪島市）は、能登半島北部の河原田川左岸の台地上に位置する縄文時代・古代・近世の集落跡であり、調査区中央の谷部では、縄文時代後期～晩期の粘土採掘坑や貯蔵穴を検出し、その上面には縄文土器や石器（石鏃、剥片、磨製石斧等）を含む大量の礫群を確認した。

礫群には焼礫、焼骨、土偶、石棒等も出土しており、石器製作場や祭祀の場であったと考えられる。また、この谷の東西の台地上では、古代以降の遺構が確認されている。古代では掘立柱建物や土師器を焼成したと思われる土坑などを検出した。

さらに西側台地上では、近世の掘立柱建物を3棟検出し、陶磁器が出土している。当地付近が比定地とみられる加賀藩の「輪島在住」（海防のため加賀藩士が在住した）屋敷地の一部の可能性が考えられ、注目される遺跡である。

倉垣遺跡（羽咋郡志賀町）は、旧福野潟に流れ込む安津見川左岸の台地上に位置する弥生時代～中世の集落遺跡である。

今回の調査区は、昭和53年に町教育委員会（倉垣遺跡調査団）が実施した旧加茂小学校建設工事にかかる調査地の北西～南西側に位置する。

調査区北側では、古墳時代の竪穴建物と平安時代の掘立柱建物を確認し、弥生土器、土師器、須恵器、打製石斧や砥石等の石器が出土した。また、調査区南側では川跡を確認し、古墳時代後期の土師器・須恵器が多量に出土している。今回は狭小な調査区域であったが、当該地域の歴史を解明する上で、有意義な調査であったといえる。

ひとつはり  
一針C遺跡

所在地 小松市一針町地内  
調査面積 3,570㎡ (春期報告分 1,790㎡)  
調査期間 令和4年4月13日～6月10日  
同年10月11日～令和5年1月27日

調査担当 伊藤雅文 松山和彦 安中哲徳  
西田昌弘 新美祥人夢 水田 勝  
小森康弘 岩城栄淳 齊藤綾乃  
上村顕太朗 舟澤朱音



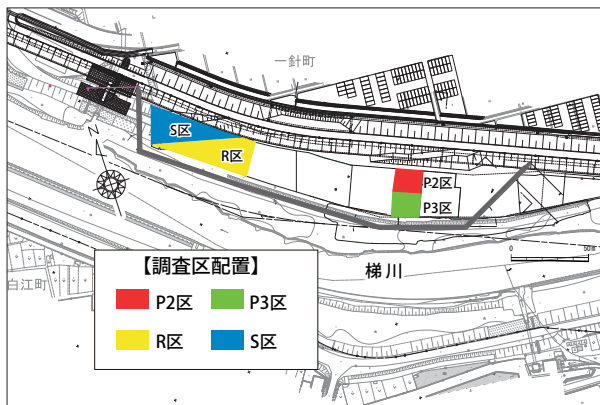
遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・上流側のP2区下層では、弥生時代後期～平安時代までの旧自然流路を検出した。
- ・P2区最下層では、流路下部に弥生時代中期の集落を囲む環濠の一部を検出した。
- ・下流側のR・S区中層では、梯川旧流路沿いに弥生時代～平安時代の集落跡を確認した。
- ・流路埋没後の面で室町時代の遺構を検出、複数の中世の井戸や竪穴状の土抗などを確認した。

遺跡は、小松市北部に流れる梯川の中流域右岸に位置する、弥生時代から中世の集落遺跡である。平成25年度から、梯川河川改修事業に伴う発掘調査を行っている。梯川の氾濫などにより土砂の堆積・運搬・浸食の影響を受けやすく複数の時代の生活面が重複して検出されている。

令和4年度は、昨年度に引き続き、新たにつくられた堤防の内側で、増水期を避けた春(4月～6月)と秋(10月～1月)に分けて調査を行い、春期は昨年度の調査を引き継ぎ、上流側のP2区下層・最下層、下流側のR・S区中層を調査した。今号は、春期の調査成果を中心に紹介する。



令和4年度調査区割図



調査区 (P2区下層) 全景 (北東から)

上流側のP2区下層では、弥生時代後期～平安時代に流れていた梯川の旧流路を検出し、土器や砥石などが出土した。流路下部の最下層では、弥生時代中期の集落を囲んでいた環濠の一部も確認した。規模は、上幅約2.0m、深さ約0.6m、下幅約0.7mであり、断面形状は、逆台形を呈する。

下流側R・S区中層では、蛇行しながら流れていた梯川旧流路沿いに弥生時代～平安時代の集落跡を確認した。また、流路埋没後に掘られた中世(室町時代)の井戸の中には竹製のタガを持つ結桶の井戸枠

も確認した。そのうちの一基には、中央部に竹を検出しており、埋める時に儀式をしていた可能性がうかがえる。その他にも、複数検出されており、切り合っているものや近接して掘られていることから集落が絶えず営まれていたと考えられる。また、中世の掘立柱建物柱穴や竪穴状の土抗、水路状の溝などの遺構も確認した。

弥生時代の土抗からは、緑色凝灰岩製の管玉未成品や剥片などが出土したことから、集落内で玉つくりが行われていたことがうかがえる。また、柱穴状の小穴からは、柱痕跡が確認できるものを検出したが、建物として復元するには検討が必要である。

各調査区からは、弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器をはじめ、中世の土師器や加賀焼・越前焼・珠洲焼・青磁・白磁などの陶磁器、土錘や円盤状陶製品などの土製品・陶製品、行火や石臼などの石製品、曲物や網杵や漆器椀などの木製品、鉄滓などの多彩な遺物が出土した。

秋期は、上流側のP3区下層・最下層および下流側のR・S区下層を調査予定であるが、春期で確認された上流側のP2区最下層の環濠のつながりが明らかになるとともに、下流側のR・S区中層で確認された弥生時代の生活面がさらに明らかになるものと思われる。

(舟澤朱音)



中世の竹製のタガを持つ結桶の井戸杵



弥生時代中期の環濠（東から）



中世の網杵（南東から）



中世の漆器椀出土状況（北から）

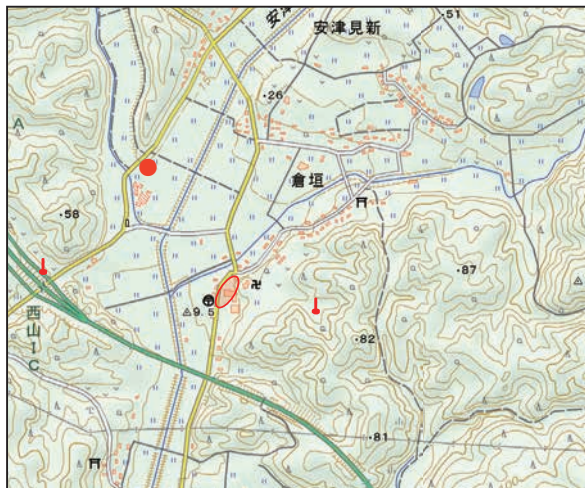
## くらかき 倉垣遺跡

所在地 羽咋郡志賀町倉垣地内

調査面積 480 m<sup>2</sup>

調査期間 令和4年10月4日～12月2日

調査担当 久田正弘 舟澤朱音



遺跡位置図 (S=1/25,000)

遺跡は、羽咋郡志賀町の南東部にあって、安津見川左岸の丘陵から平野部にかけて立地する遺跡である。発掘調査は一般県道羽咋田鶴浜線改築工事に伴うものであり、今年度は調査対象箇所中央から南側で実施した。調査区は旧加茂小学校跡地で、校舎建設に伴い昭和53年に発掘調査が実施されており、今回の調査区はその北西～南西に位置する。

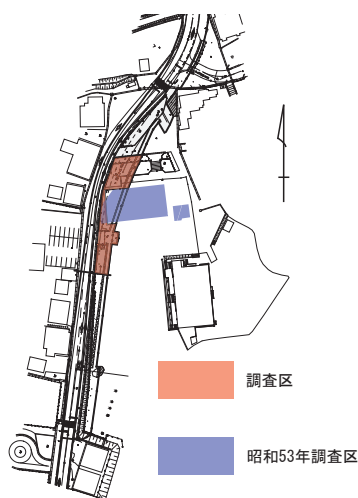
調査区内は学校施設などにより攪乱を受けているが、北側のⅠ区では古墳時代と思われる竪穴建物4棟と平安時代と思われる掘立柱建物1棟を確認した。竪穴建物は、G2グリッドでは方形プランを、F2～G3グリッドでは外周溝が円形になる竪穴建物3棟を

確認した。ほかにも深い柱穴があるので、他に数棟存在した可能性がある。出土土遺物は、弥生時代後期の土器、土師器、古墳時代～平安時代の須恵器、縄文時代の打製石斧、古墳～平安時代の砥石などを確認している。

南側のⅡ区では掘立柱建物と思われる柱穴以外は遺構が少なく、それより南側は川跡であった。川跡は学校跡地の東側にある谷から流れ込んでおり、調査区内では北東から南西に流れていた。古墳時代後期の土師器・須恵器が多量に出土した。

遺跡の北西には横穴式石室を持つ倉垣丸山古墳(6世紀代後半～7世紀初頭)がある。東側の谷頭には倉垣コマクラベ1号窯跡が、西側の倉垣浄水場付近には窯跡が存在し、ともに時期は9世紀後半～10世紀代の須恵器窯である。倉垣遺跡は地理的・時間的關係から、これらの遺跡に関連すると思われる。

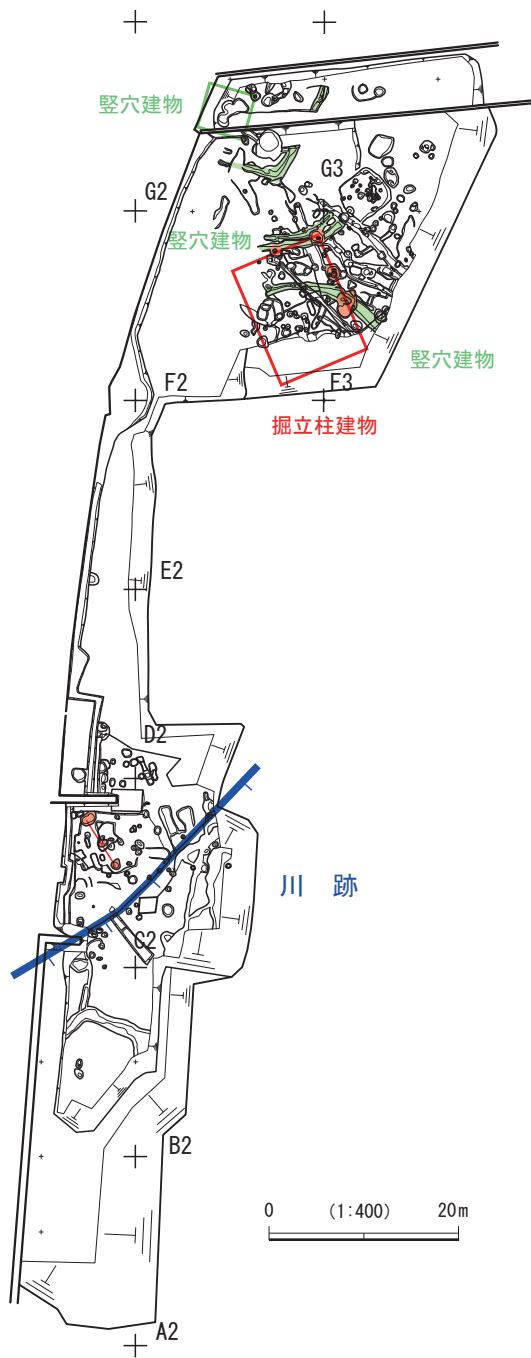
(久田正弘)



調査区位置 (S=1/4000)



調査区遠景 (南から)



調査区全景 (S=1/400)



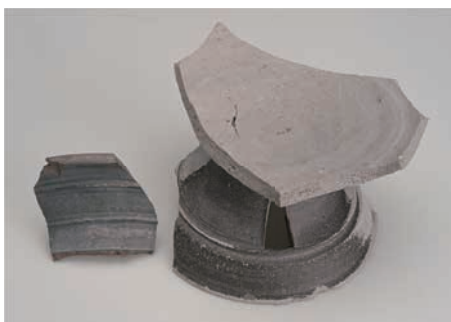
竪穴建物・掘立柱建物 (南西から)



掘立柱建物 (北東から)



川跡全景 (北東から)



川跡出土須恵器

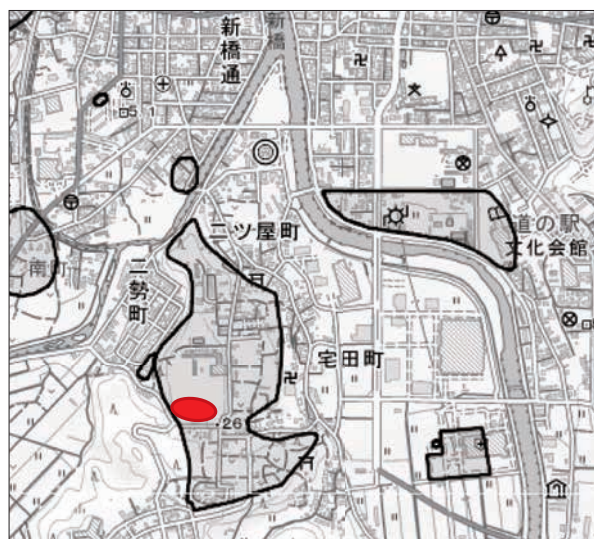


川跡土師器高环出土状況

たくだうわのやま  
宅田上野山遺跡

所在地 輪島市宅田町地内  
調査面積 2,800 m<sup>2</sup>

調査期間 令和4年5月16日～10月21日  
調査担当 町田賢一 十二将斗



遺跡地図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・中央の谷部では、縄文時代後期から晩期の粘土採掘坑、貯蔵穴とみられる土坑、その上に土器片や石器を含む礫群を確認した。礫群は石器製作や祭祀場とみられる。
- ・西側の台地部では古代の側柱式掘立柱建物や焼成土坑などを検出した。建物の柱穴は大規模で大型の建物が想定される。
- ・東側の台地部では古代の総柱式掘立柱建物や焼成土坑、近世の掘立柱建物を検出した。近世の建物は陶磁器の時期から、比定地となっている輪島在住関連の屋敷地の一部にあたる可能性がある。

遺跡は、輪島市街の南方で、河原田川と鳳至川の合流点から南の気勝山へと続く通称“上ノ山”と呼ばれる台地上にある。調査区は遺跡の中央西側で、現標高は約26mである。

調査区は、試掘調査の結果から中央に鞍部のある平地と想定されていた。重機による表土掘削時に鞍部の深掘りを行ったところ多くは攪乱層で、その下に縄文時代から古代の遺物を確認した。このため、鞍部については谷部と呼び換え、攪乱層を重機で取り除き、一部で古代面(土師器や須恵器の包含層、ピット)を調査し、さらに縄文時代面(後期～晩期)まで重機による掘削を行った。縄文時代面には谷部の東肩や底面で粘土採掘坑とみられる凹地や土坑があり、その上面に大量の礫が廃棄されていた。礫には縄文土器片や石鏃、剥片、磨製石斧とその未成品、砥石などがあり、廃棄や石器製作の場とみられる。このほかに焼礫、焼骨、土偶、石冠、石棒などもみつかり、祭祀の場でもあったと考えられる。谷部西側では大型の土坑があり、遺物はほとんどみつからないが、形状や堆積状況から貯蔵穴とみられる。

谷部西側の台地では、古代の側柱式掘立柱建物6棟、焼成土坑2基、竪穴状土坑1基などがある。掘立柱建物はおおむね3×2間以上で、大型のものが多く、SB1とした建物の柱穴は大型の方形で、断面を観察すると、柱痕跡を受けるような形で下部に粘土を敷いていた。この遺跡の中心的な建物と推定される。焼成土坑は隅円方形を呈し、底面・壁面が被熱し、外面に向かって炭化物が集積していた。遺物の出土はほとんどないが、その形状から土師器の焼成遺構とみられる。竪穴状土坑は、長辺3m以上の隅円方形で、埋土から8世紀代の須恵器・土師器・刀子などが出土した。なお、掘立柱建物は竪穴状土坑に切られており、これよりも古く、7～8世紀となるのだろう。

谷部東側の台地では、古代の側柱式掘立柱建物5棟、総柱式掘立柱建物4棟、焼成土坑1基など、近世の掘立柱建物3棟などがある。古代の総柱式掘立柱建物は2×2間で軸線を揃えて並んでおり、倉庫とみられる。側柱式掘立柱建物は一部の検出にとどまり、全体はわからないが、2×2間以上とみられ、西側台地部の建物と同様なものとみられる。近世の掘立柱建物は掘り方が浅く、柱間が短く、間取りははっきりしないが、規模の大きな屋敷と付属建物が想定される。柱穴から近世後半の陶磁器が出土しており、当地付近に比定されている輪島在住における役屋敷の一部にあたる可能性がある。(町田賢一)



SB1 (南から)



谷部西側建物群 (北から)



谷部貯蔵穴 (東から)



谷部西側焼成土坑 (東から)



谷部礫群 (北から)



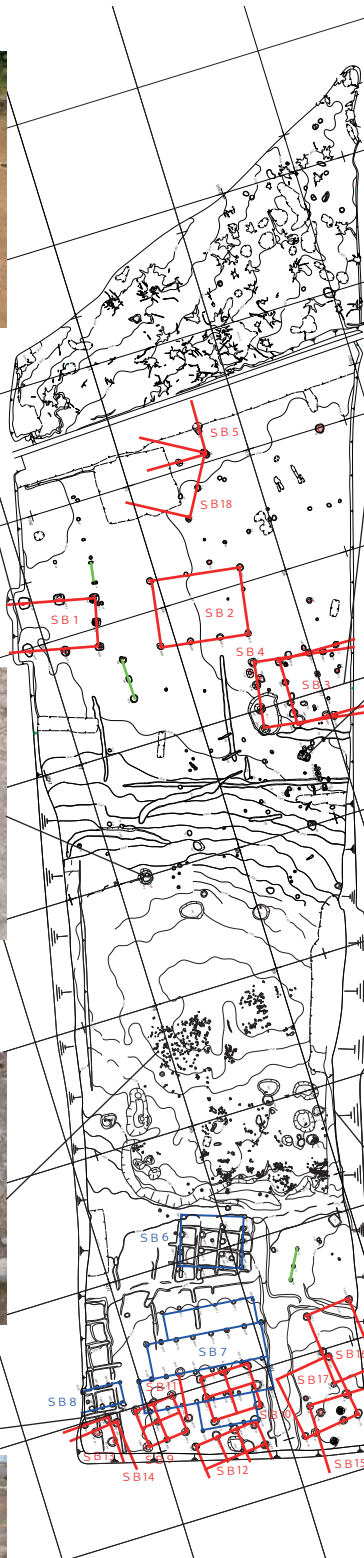
谷部 (北から)



谷部東側建物群 (南から)



谷部東側建物群 (北から)



宅田上野山遺跡令和4年度調査区 (S=1/600)

## 令和4年度上半期の出土品整理作業

### 国関係調査グループ

令和4年度上半期は弓波遺跡（加賀市 平成28年度調査）、一針C遺跡（小松市 平成27、29、30年度調査）の整理作業を行った。

弓波遺跡は漆器の実測・トレースを行った。ほとんどが黒漆のみか、黒漆に朱漆で文様を施してある椀、皿類であったが、黒漆の地に朱漆で文様を施された片口鉢を1点実測している。

一針C遺跡は平成27年度分の土器、土製品、金属器、鉄滓、木製品の実測・トレース、平成29、30年度分の土器等の記名・分類・接合という整理内容である。上半期は平成29、30年度分の記名・分類・接合を行った。両年度とも弥生時代から中世にかけての遺物が出土している。総じて遺存状態はあまり良好とはいえないものが多く、調整も摩耗している個体が多かった。実測・トレースは下半期に行う。

（横山そのみ）



土器の分類・接合



甕・壺・鉢の接合



壺の接合



高杯の接合

## 県関係調査グループ

上半期は、弓波遺跡(加賀市 平成28年度調査)、小川B遺跡(白山市 令和3年度調査)、酒井バンドウマエ遺跡(羽咋市 平成27・29年度調査)・寺境タブ遺跡(羽咋市 平成29年度調査)、金沢城跡(金沢市 令和3年度調査)の整理作業を行った。

弓波遺跡では、鉄滓・煙管・銃弾・銅銭の実測・トレースを行った。

小川B遺跡では、土器の記名・分類・接合と実測・トレース作業を行った。弥生土器は甕・壺・装飾器台、墨書土器、須恵器では坏身や坏蓋を多く実測した。小片が多いため傾きに苦労した。

金沢城跡では、瓦の記名を行った。

酒井バンドウマエ遺跡、寺境タブ遺跡では、土器の記名・分類・接合、木器の分類・接合と実測・トレースを行った。記名・分類・接合作業では、須恵器の大甕・双耳瓶、土師器の耳皿、墨書土器も10点以上接合した。実測・トレースでは、土器は甕・壺・甑、須恵器の坏身や坏蓋も多く、瓦塔も2点実測した。この他、木製品は柱根・下駄、石製品は石鏃・砥石、銅銭も50点以上実測を行った。トレース作業は下半期に続く。

(小島紀子)



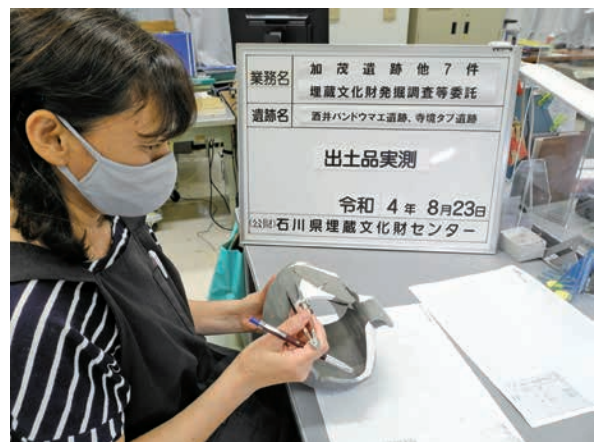
金属のトレース (弓波遺跡)



土器の実測 (小川B遺跡)



記名・分類・接合  
(酒井バンドウマエ遺跡、寺境タブ遺跡)



土器の実測  
(酒井バンドウマエ遺跡、寺境タブ遺跡)

## 特定事業調査グループ

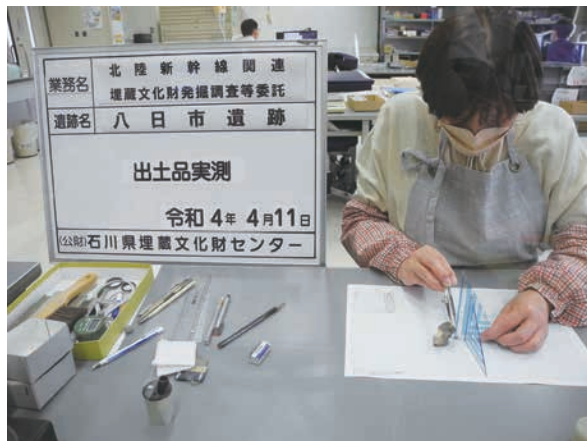
上半期は、八日市遺跡(加賀市 平成29年度調査)、田岸遺跡(七尾市 平成30年度、令和元年度調査)、金沢城跡(金沢市 令和3年度調査)の整理作業を行った。

八日市遺跡では、鍛冶・鑄造関連の遺物の実測・トレース作業を行った。鉄滓や羽口の一部、鑄型と思われる破片や、送風管と思われる破片などがあった。どれも小片だったので、置き方など調査担当者に聞きながらの実測になった。

田岸遺跡では、昨年度に引き続き縄文土器の実測・トレース作業を行った。文様の図化も行ったがやはり難しく、途中でどこをとっていたか迷ったりと実測に手間取った。様々な文様や器形があり、とても勉強になった。

金沢城跡では、二ノ丸、数寄屋屋敷西の瓦・陶磁器等の記名・分類・接合作業を行った。瓦の記名作業は3グループ合同で行い、分類・接合作業は特定事業調査グループで行った。分類・接合作業は下半期に続く。

(土生久美子)



鍛冶・鑄造関連遺物の実測（八日市遺跡）



縄文土器の実測（田岸遺跡）



縄文土器の実測（田岸遺跡）



陶磁器の分類・接合（金沢城跡）

# 小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧について

森 貴教(新潟大学)

林 大智(公益財団法人石川県埋蔵文化財センター)

## はじめに

弥生時代の生業を支える道具としての石器は、水稻農耕社会に必要な不可欠の文化要素である。なかでも柱状片刃石斧は、木工具として生産用具の体系の中で基幹をなす物資であり、農耕文化の担い手や文化受容の在り方を考察するうえで注目され、これまで研究が蓄積されてきた(下條1997・2002など)。

小松市立博物館には、「月津村柴山出村」と「小松市木場町団地」で採集された柱状片刃石斧2点が所蔵されている。これらの柱状片刃石斧は、前者が大型、後者が中型の完形品であり、西日本から東日本への弥生文化の展開を考察するうえで非常に重要な資料であるが、これまでほとんど知られていなかった<sup>(1)</sup>。そこで本稿では、今後の議論の深化を喚起するため、資料の紹介を行いたい。

なお、本稿の執筆は1を林、その他を森が草稿をまとめ、双方協議のうえ林が加筆・修正した。(森)

## 1. 柴山出村と木場町の周辺遺跡

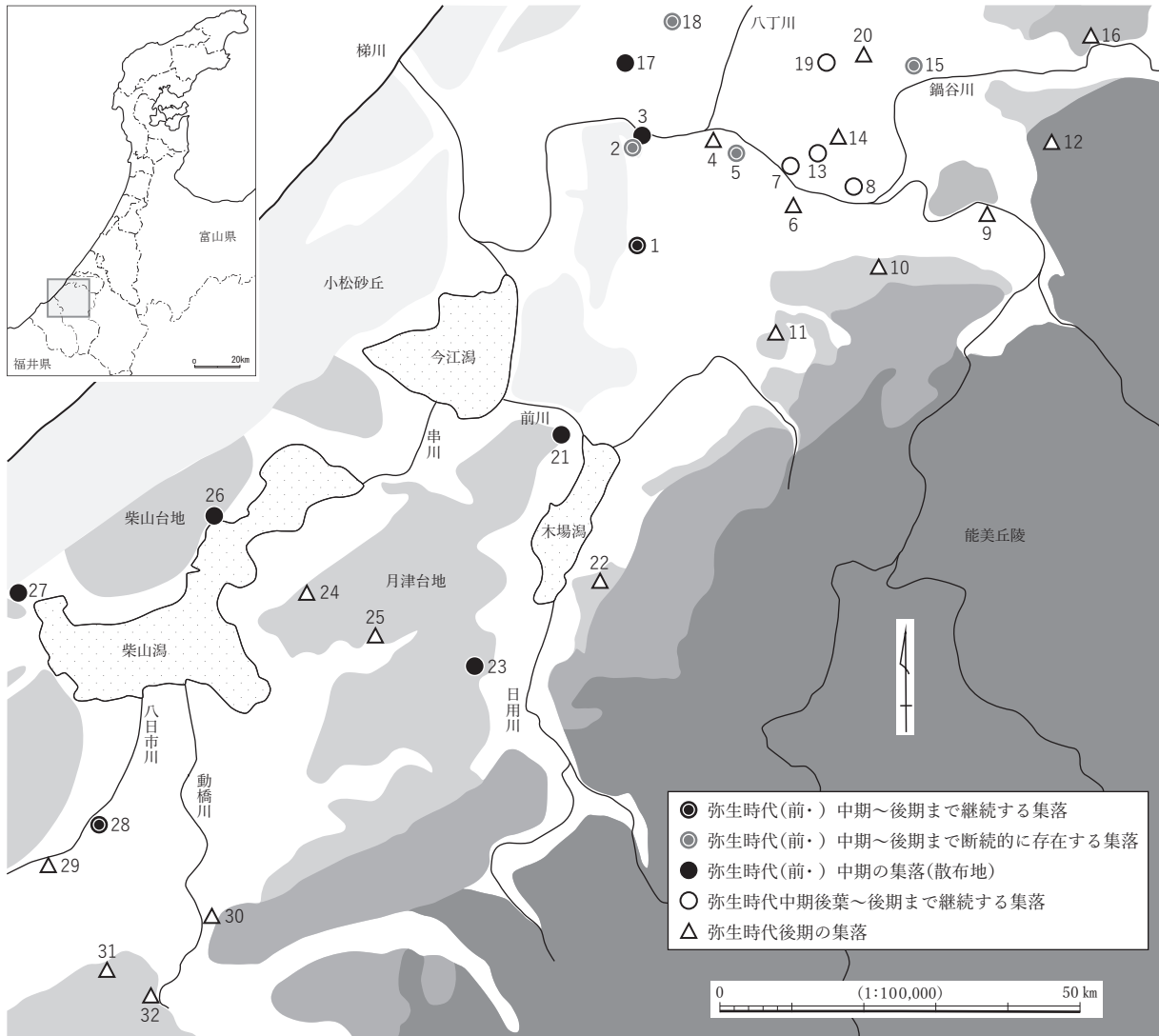
本稿で対象とする2点の柱状片刃石斧は、資料1が加賀市柴山町(旧月津村柴山)地内、資料2が小松市木場町地内で採集された。両採集地は、石川県南部にかつて存在していた加賀三湖(今江潟、木場潟、柴山潟)と呼称される潟湖が群在した水郷地帯の周縁にあたる(第1図)。加賀三湖は、縄文海進ピーク頃(約7,300年前)の海面上昇で小松市付近に形成された内湾域が、小松砂丘の発達によって日本海から切り離された後、河川から供給された堆積物で埋め残された水域と考えられており、今江潟全域と柴山潟南西部を除く6割程度の区域は干拓により耕地化されている(昭和43年完工)。

両資料の採集地は、資料1が柴山出村遺跡(第1図26、県番号636601)のA地点(安(編)2002)、資料2が木場C遺跡(同図22、県番号319800)より1km程度南方に位置する小松市木場台地内と推測され、同じく加賀三湖周辺で弥生時代中期の遺物が確認できる小松市五郎座貝塚(同図21)や加賀市新堀川遺跡(同図27)などとともに、潟湖を臨む台地縁辺部という立地の共通点がみられる。

かつての加賀三湖は、柴山潟が串川で今江潟と連なり、木場潟より今江潟を経由し流れる前川と小松市域北部を西方に流れる梯川が合流して、安宅海岸から日本海に注いでおり、水深が浅く水生動植物も豊富であったことから、舟運を利用した内水面交通や漁業の利便性が高く、潟湖縁辺の低湿部には水田適地が広がっていたことを推測できる。一方で、緩やかな梯川(前川)の流れと限定された河口部(安宅水戸口)は、雨季の増水による水害、潟水期の海水逆流による塩害を発生させ、冬季には風浪で打ち上げられた砂礫が河口を閉塞することで、梯川(前川)下流の水位を上昇させ、加賀三湖周辺に度重なる水害を引き起こしてきた。

加賀三湖周辺に分布する弥生時代中期の集落は、交通路であり生業の基盤をなした潟湖のほとりが選択され、水害のリスクを軽減するため、小規模で継続性に乏しい集落を低湿部に近接した台地上に成立させた可能性が高く、弥生時代後期以降もその立地や集落形態に大きな変化が認められない。

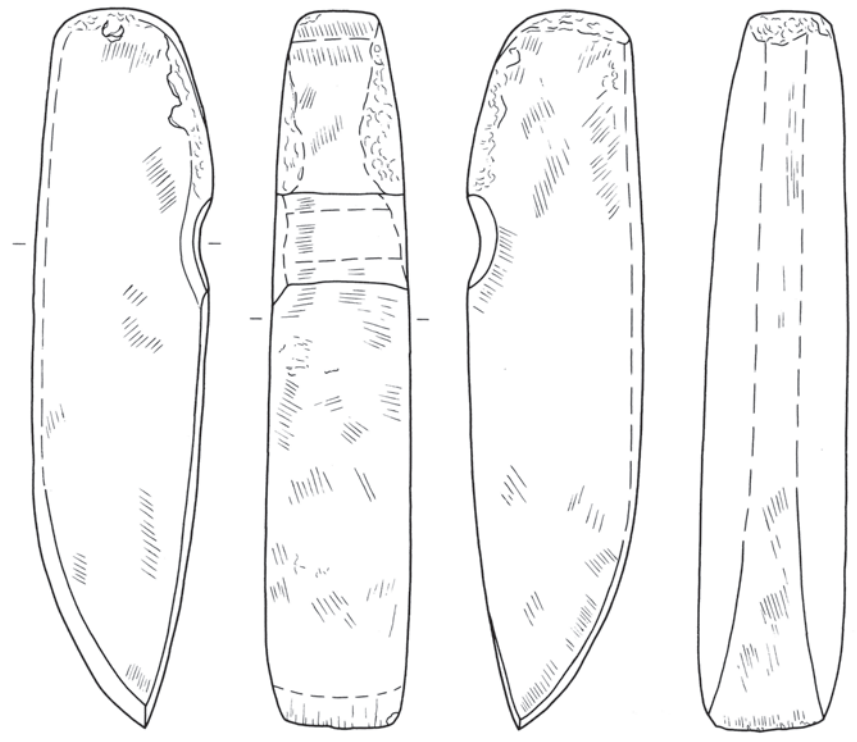
このことは、加賀三湖周辺の南北に所在する比較的広い沖積平野で、小松市八日市地方遺跡に代表される大規模で長期継続的な集落が弥生時代中期に成立・発達し、大規模集落が衰退・解体する弥生時代中期末以降は、これと置き換わるように、梯川水系の中流域や低丘陵上に多数の中・小規模集落を派生させ、水系単位で遺跡群が形成される集落動態と対照的な様相を示している。(林)



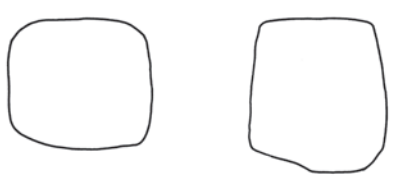
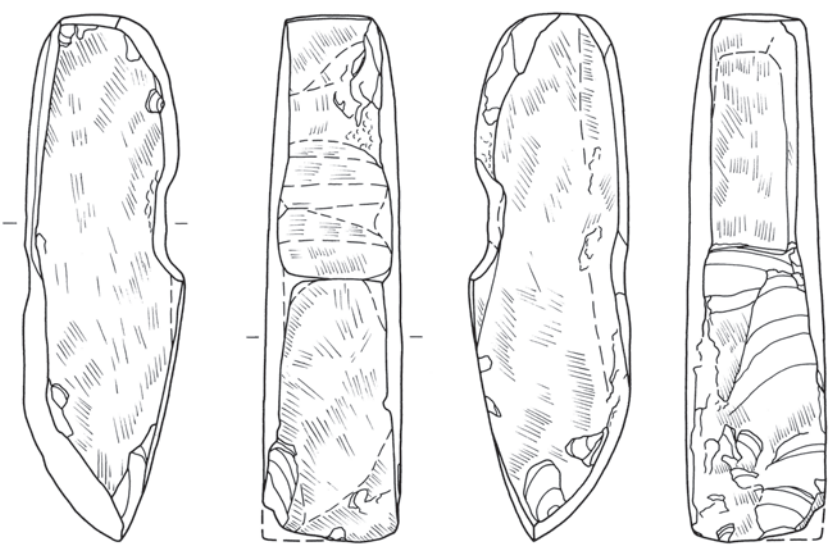
地域	No.	遺跡名	前期	中期前葉	中期中葉	中期後葉	後期前半	後期後半	終末期	古墳前期
-	1	八日市地方	■	■	■	■	■	■	■	■
-	2	園町		■	■	■	■	■	■	■
梯川	3	梯川鉄橋			■	■				
	4	平面梯川					■	■	■	■
	5	白江梯川		■	■	■	■	■	■	■
	6	漆町					■	■	■	■
	7	一針C				■	■	■	■	■
	8	千代オオキダ	■			■	■	■	■	■
	9	荒木田				■	■	■	■	■
	-	10	八幡					■	■	■
	-	11	吉竹					■	■	■
-	12	河田山					■	■	■	
鍋谷川	13	一針B				■	■	■	■	■
	14	千代・能美					■	■	■	■
	15	牛島ウハシ	■	■	■	■	■	■	■	■
	16	八里向山						■	■	■

地域	No.	遺跡名	前期	中期前葉	中期中葉	中期後葉	後期前半	後期後半	終末期	古墳前期
八丁川	17	銭畑				■	■	■	■	■
	18	松梨	■	■	■	■	■	■	■	■
	19	大長野A				■	■	■	■	■
	20	千代デジロA					■	■	■	■
木場潟	21	五郎座貝塚			■					
	22	木場C					■	■	■	■
月津台地	23	島			■					
	24	額見町西						■	■	■
	25	念仏林南						■	■	■
柴山潟	26	柴山出村	■	■	■	■	■	■	■	■
	27	新堀川				■	■	■	■	■
八日市川	28	猫橋						■	■	■
	29	弓波						■	■	■
動橋川	30	松山D						■	■	■
	31	庄・西島						■	■	■
	32	二子塚東田						■	■	■

第1図 加賀三湖周辺における弥生時代遺跡の分布



資料1  
(柴山出村)



資料2  
(木場町)



第2図 小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧 (S = 1/2)



資料1  
(柴山出村)



資料2  
(木場町)



写真1 小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧 (S = 1/2)

## 2. 資料の観察所見

本稿で紹介するのは小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧 2 点である(第 2 図・写真 1)。2022年 5 月 30・31日に同博物館にて資料調査を行った。なお斧の部分名称は佐原(1994)に基づく。

### 【資料 1】

「柴山出村遺跡出土抉入石斧」として登録されているもので、「月津村柴山出村」と墨書きによる注記が右側面にある。本資料は中口ほか(1957)の129頁・第27図-1に掲載されているものと同一である。

抉入柱状片刃石斧の完形品で長さ19.1cm、幅3.8cm、厚さ4.6cm、重量612.3gを測る。灰オリーブ色～緑がかった黄灰色の色調を呈する流紋岩質凝灰岩製である<sup>(2)</sup>。全体的に研磨が施されているが、基端部と抉り上部の左右側面との境界部にのみ敲打痕が残存する。平面形は長台形である。横断面形はトンネル形で、左右両側面および後主面側は僅かに膨らむ。抉り上部は基端部に向かって緩やかに内傾する。基端部は丸みを帯びる。基端部から6.0cmの位置に長さ2.5cm、深さ 3 mmの抉りを有する(写真 2 - 1)。抉りの側面形は「」形と弧状(弓形)の中間形で、抉りの上下端は弱い稜をなし中央の底部は平坦である。抉りは横方向の丁寧な研磨が施されている。抉り下部の側面形は刃縁に向かって緩やかに内傾する。刃面上部に鑄はなく曲面をなしており、前主面は直線的である。後主面側の刃縁は使用によるとみられる長軸方向の線状痕が認められる(写真 2 - 2)。

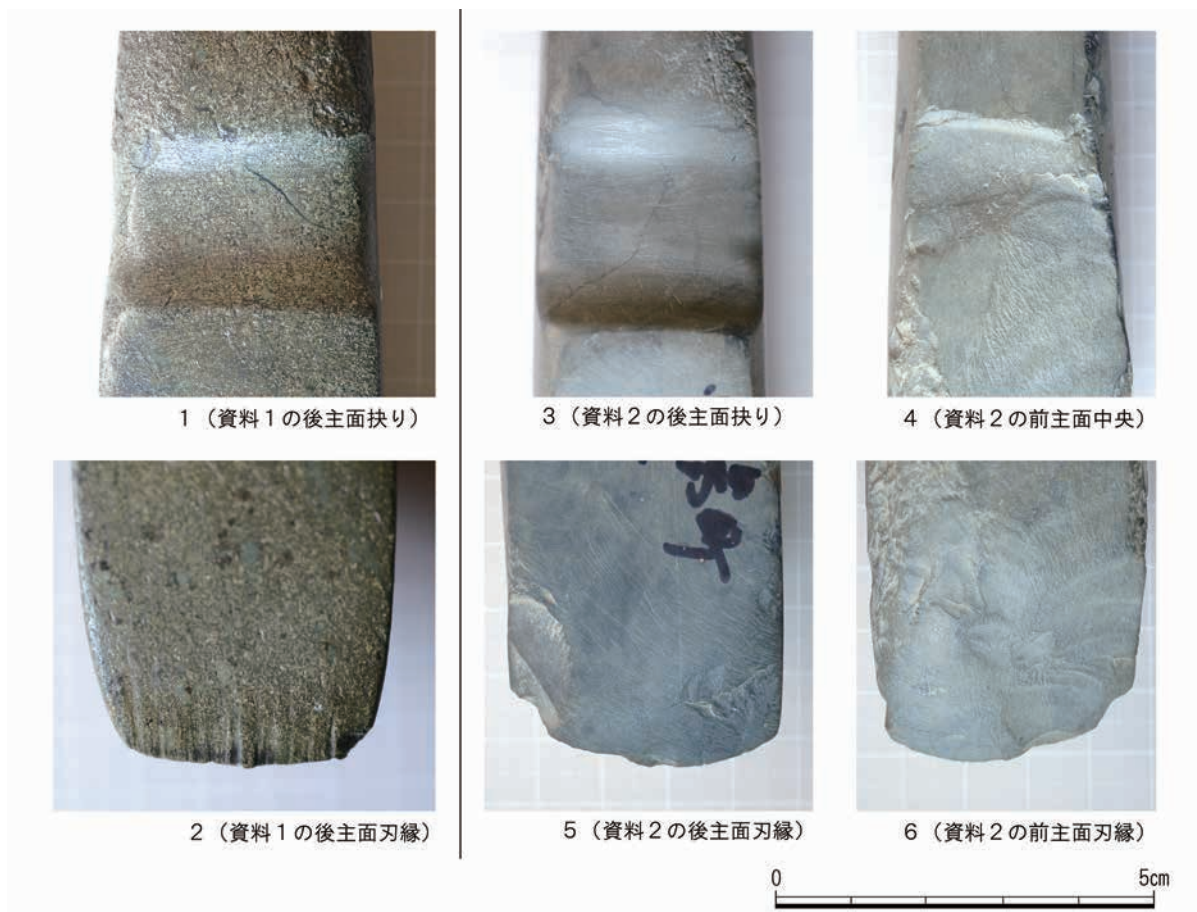
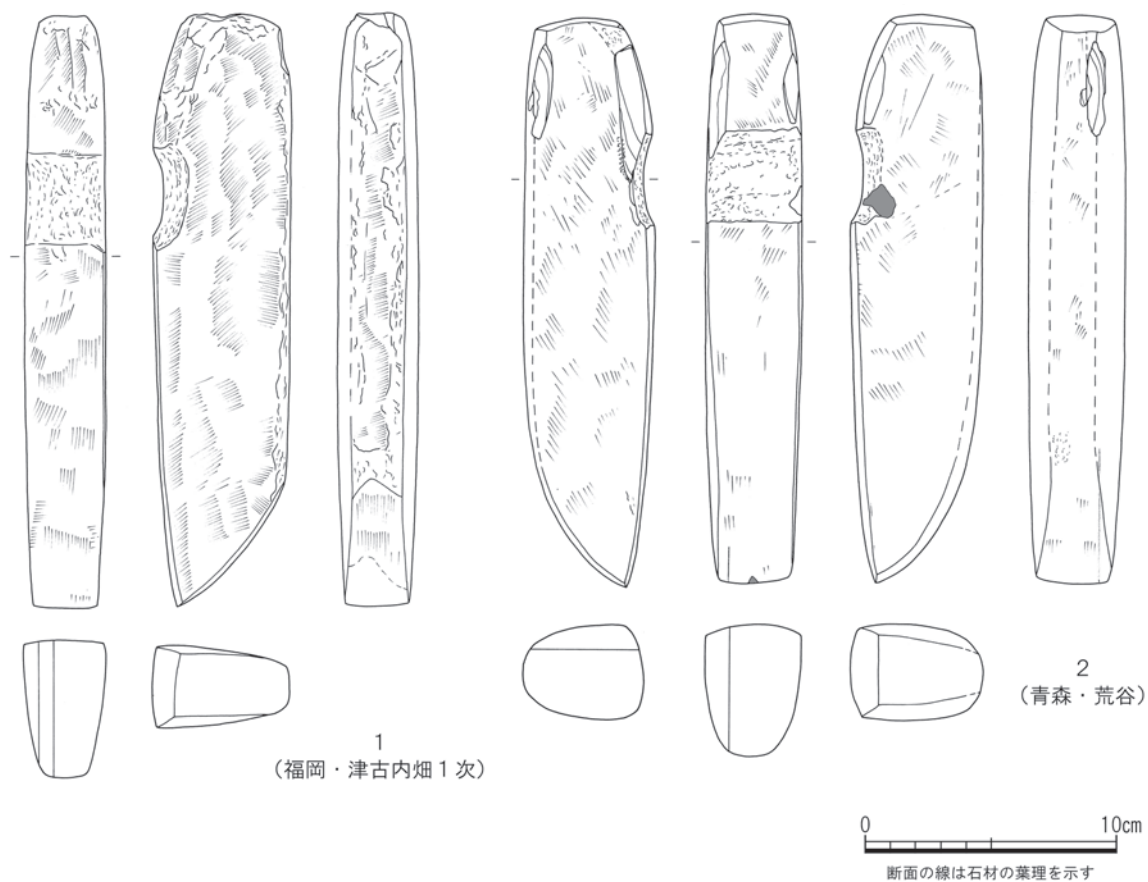


写真 2 小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧の細部 (S = 1/1)



第3図 資料1と関連する資料 (S = 1/3)

【資料2】

「木場町出土磨製抉入石斧」として登録されているもので、「小松市木場町団地」と黒色マジックによる注記が後主面の刃部にある。木場台団地造成(昭和49年完工)の際に採集されたものとみられる。

抉入柱状片刃石斧の完形品で長さ13.9cm、幅3.7cm、厚さ4.3cm、重量376.6gを測る。黒灰色～オリーブ灰色の色調を呈する「層灰岩」<sup>(3)</sup>製である。風化程度は弱く、光沢を帯びる部分もみられる。石材の葉理方向は不明である。全面的に研磨が丁寧に施されている。平面形は長方形である。横断面形は隅丸方形で、左右側面は僅かに膨らむ。抉り上部は基端部に向かって丸みを帯びながら内傾する。基端部は平坦に研磨されている。基端部から5.5cmの位置に長さ3.3cm、深さ5mmの抉りを有する(写真2-3)。抉りの側面形は「J」形と弧状(弓形)の中間形で、抉りの中央部が僅かに盛り上がる。抉りは横方向の丁寧な研磨が施されている。また、前主面の中央部にも剝離による抉りがあるが、誤って作出されたものとみられる<sup>(4)</sup>(写真2-4)。前主面側の抉りは、抉りの剝離痕を切って器面の研磨が施されている。抉り下部の側面形は刃縁に向かって直線的に内傾する。刃面上面に鑄はなく曲面をなしており、敲打痕が残る。前主面は直線的である。後主面側の刃縁に再研磨痕がみられる(写真2-5)。使用に伴い前主面側の刃部表面が剝離しているが、破損面を切って再研磨が施されている(写真2-6)。(森)

3. 考察：資料の時期的位置づけ

本稿では、小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧2例について報告した。以下では、これらの石斧が製作された時期について類例との比較から考察を行う。

まず資料1は、基端部が丸みを帯びる点と抉りに研磨が施されている点を除くと、青森県八戸市荒谷

遺跡出土品(第3図2)と形態的特徴の共通点を多く見出せる。荒谷例は、横断面形において左右両側面が僅かに膨らみ、形態的に弛緩することから本資料よりも型式学的に新しい。また、福岡県小郡市津古内畑遺跡1次調査出土品(第3図1)にも類似するが、横断面形が平坦面からなる長台形で刃面上部に鑄をもち、平基をなすことから、本資料よりも型式学的に古い。以上のことから、本資料は津古内畑1次例と荒谷例を型式学的に繋ぐ資料として位置づけられる。津古内畑1次例は弥生時代前期中葉から前期後葉、荒谷例は弥生時代前期後葉から前期末を上限年代として製作されたと考えられることから(森2021)、本資料は弥生時代前期後葉から前期末頃の所産といえる。

なお本資料は、下條(1997)による分類でD型式、中(2008)による分類でT I - ii a型式に該当するとみられる。本資料が採集された柴山出村遺跡は、土器型式の柴山出村式(弥生時代前期後葉から中期初頭)の標識遺跡であるが、遺跡が存続した時期の所産とみて大きな矛盾はなさそうである。

次に資料2は、横断面形、抉り下部の側面形など福岡県行橋市下稗田遺跡出土品(第4図1)と形態的特徴の共通点を多く見出せる。下稗田例はA地区95号貯蔵穴からの出土で、伴出した土器から所属時期は弥生時代中期初頭から中期前葉と考えられることから、本資料も同時期の所産であろう。

下條(1997)による分類でC型式、中(2008)による分類でT I - i 型式に該当するとみられる。また、下條(2002)が整理した片刃石斧の展開の第三段階(円形粘土帯土器段階=弥生時代前期末~中期前半)にあたる。なお、本資料が採集された木場町周辺では、現在まで弥生時代前期から中期の遺跡は見つかっておらず、本資料が当該時期の集落の存在を示唆するものとして注視される。(森・林)

## おわりに

本稿で紹介した柱状片刃石斧2例は、北陸西部のみならず、西日本から東日本にかけての弥生文化の展開過程を考察するうえで非常に重要な資料である。特に資料1は、東北北部における柱状片刃石斧の唯一の遺跡出土事例である荒谷例の型式学的な位置づけを評価し、その系譜を論じるために欠かせない資料といえる。また資料2は、朝鮮半島東南部で産出する「層灰岩」製である可能性があり、北部九州から北陸地方にかけての日本海沿岸における広域的な交流を示唆するものとして注目される。

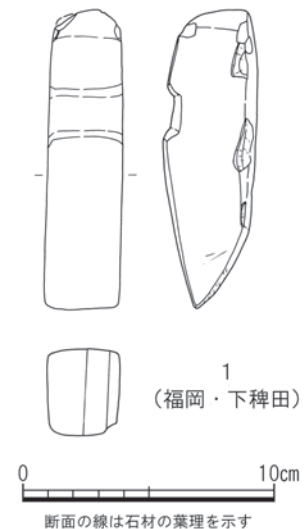
今後、弥生文化の担い手や交流の実態を明らかにするために、関連資料のさらなる研究が望まれる。本稿による資料紹介がそうした研究の一助となれば幸いである。(森)

## 謝 辞

本稿を作成するにあたり小松市立博物館の山前圭司氏に資料調査でお世話になった。また佐藤由紀男氏、下濱貴子氏からもご教示とご協力を賜った。末筆ながら感謝申し上げます。

なお本稿はJSPS科研費(JP 20H01356・JP 21K00970)の助成を受けたものである。

(註1) これらの柱状片刃石斧2例は、2021年7月17日に開催された2021年弥生時代研究会第4回online学習会の佐藤由紀男氏による「東北北部における弥生時代の磨製石斧の系譜と派生する課題」と題する研究発表において触れられ、その存在を知った。席上、詳細な実測図が公表されておらず、学界への資料紹介が課題であることが確認された。その後、佐藤氏と小松市埋蔵文化財センターの下濱貴子氏に資料の所蔵や文献情報などについてご教示を頂き、資料調査を行う運びとなった。



第4図 資料2と関連する資料(S=1/3)

(註2) 石材の鑑定においては高橋・大木(2015)を参照した。

(註3) 「層灰岩」は主に考古学分野で通称(石器外面の肉眼観察に基づく岩石名)として多用されている名称であり、岩石学分野では一般的なものではない。地球科学的には「火山砕屑物と堆積性砕屑物との混合物が固結した岩石で、特に火山灰と細粒砕屑物の混合した場合を指す」もので(鈴木2005, p.419)、頁岩と凝灰岩との中間の性質をもつ葉理が発達した岩石と理解されている。北部九州における弥生時代前期から中期の片刃石斧や磨製石剣などに多く用いられている。層灰岩製片刃石斧は福岡平野、二日市地峡帯、佐賀平野を中心に北部九州に広く分布し(森2013)、東は石川県小松市八日市地方遺跡まで点在することが指摘されている(佐藤・宮田2018)。近年、層灰岩製石器の石材原産地推定研究が進められ(柚原ほか2020・2022)、福岡県行橋市下稗田遺跡出土の片刃石斧は、韓国慶尚北道高靈郡義鳳山(慶尚超層群新洞層群)の「層灰岩」が石材として用いられたと推定されている(Mori et al.2022)。

(註4) 例外的に挟りが逆につく場合、すなわち後主面側に挟りと刃面のある挟入柱状片刃石斧として、大分県雄城ノ台遺跡出土品がある(立平1997)。

## 【参考文献】

- 佐藤由紀男・宮田 明 2018「石川県小松市八日市地方遺跡出土の層灰岩製片刃石斧と三面石斧をめぐって」『考古学研究』第65巻第3号 考古学研究会
- 佐原 眞 1994『斧の文化史』(UP考古学選書6) 東京大学出版会
- 下條信行 1997「柱状片刃石斧について」『古文化論叢—伊達先生古稀記念論集—』伊達先生古稀記念論集刊行会
- 下條信行 2002「片刃石斧の型式関係からみた初期稲作期の韓日関係の展開について」『清溪史学』16・17合輯 韓国精神文化研究院・清溪史学会
- 鈴木淑夫 2005『岩石学辞典』朝倉書店
- 高橋直樹・大木淳一 2015『石ころ博士入門』全国農村教育協会
- 立平 進 1997「加工石斧(柱状片刃石斧・扁平片刃石斧)」『道具と技術I』(弥生文化の研究5) 雄山閣
- 中口 裕・上野与一・永井泰蔵 1957「柴山出村の生活—弥生中期—」『柴山潟：自然と社会 柴山潟周辺総合調査報告書』片山津町公民館
- 中 勇樹 2008「弥生時代における片刃石斧の変遷と技法について—西日本を中心に—」『地域・文化の考古学—下條信行先生退任記念論文集—』下條信行先生退任記念事業会
- 森 貴教 2013「弥生時代北部九州における片刃石斧の生産・流通とその背景—「層灰岩」製片刃石斧を中心に—」『古文化談叢』第69集 九州古文化研究会
- 森 貴教 2021「東北地方北部の柱状片刃石斧をめぐって—系譜と時期の検討—」『靫(MOMI)』第10号記念号 弥生時代研究会
- 安 英樹(編) 2002『加賀市 柴山貝塚・柴山出村遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 柚原雅樹・梅崎恵司・森 貴教・川野良信 2020「北部九州, 下部白亜系脇野亜層群のいわゆる層灰岩の全岩化学組成」『地球科学』第74巻第4号 地学団体研究会
- 柚原雅樹・梅崎恵司・森 貴教・川野良信 2022「下部白亜系脇野亜層群と慶尚超層群新洞層群の層灰岩の全岩化学組成の比較」『地球科学』第76巻第4号 地学団体研究会
- Mori, Takanori., Yuhara, M., Umezaki, K., and Kawano, Y., 2022. Estimating the sources of stone tools made of tuffites during the Yayoi period and their archaeological significance, Japanese Journal of Archaeology, 9(2), Japanese Archaeological Association.

## 【図版出典】

- 第1図：筆者作成  
第2図：筆者実測・トレース(小松市立博物館蔵)  
第3・4図：森(2021)より一部改変・転載  
写真1・2：筆者撮影・作成(小松市立博物館蔵)

# 石川県内の琥珀と翡翠について

久田正弘

## 1. はじめに

当センターでは、報告書刊行済み遺跡の遺物再整理を実施しており、その過程で発見された琥珀・翡翠を紹介する。羽咋市吉崎・次場遺跡では2022年7～9月中に荒木・久田・山崎が翡翠30数点を確認し、久田が12月後半に翡翠探しを再開した日に琥珀を発見した。琥珀と翡翠の一部を資料化していた最中の1月中旬に白山市東相川遺跡の琥珀が発見されたので合わせて紹介する。

## 2. 吉崎・次場遺跡の調査概要

吉崎・次場遺跡は、羽咋市次場町・吉崎町・鶴多町にまたがる遺跡(第1・2図)であり、石川県立埋蔵文化財センターによる発掘調査が昭和55～59年にかけて実施(第3図)され、その成果が報告された(福島1987・福島ほか1988)。

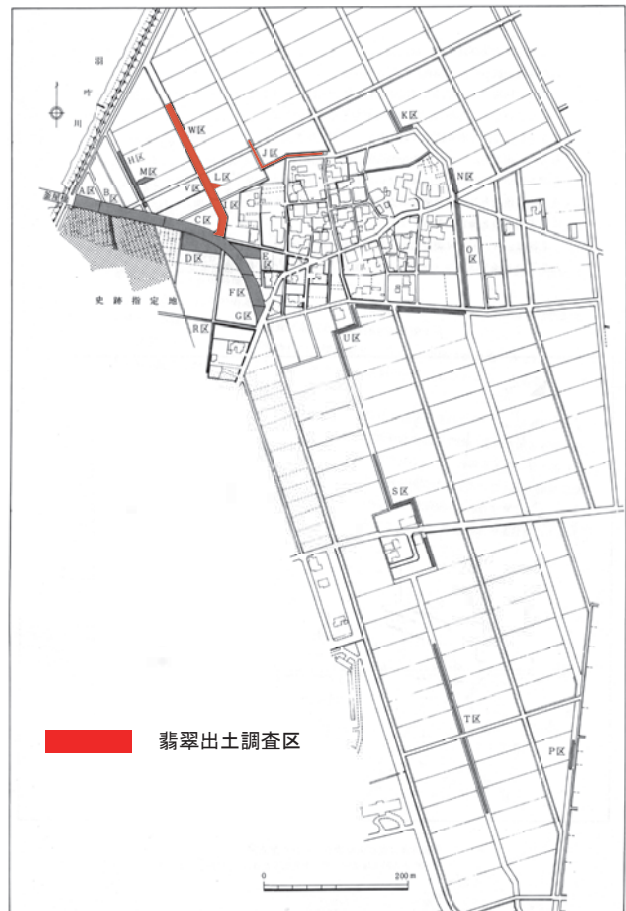
翡翠は勾玉2点、剥片類14点(第12図)が図化され、巻頭カラー写真には16点が掲載されている。選別された報告・未報告資料は100数点があり、筆者らが新たに30数点確認したので、今後確認数はもっと増えるものと思われる。



第1図 石川県全体図



第2図 周辺の遺跡 (1/5万)



第3図 県・市調査区配置図

### 3. 吉崎・次場遺跡の琥珀

第5図1は、I-3号溝出土の実測不要石器を入れたパンケースの中にそのまま保管されており、スバ80NW122b 3号ミゾと注記されている。1980年調査I-3号溝出土(第4図)であり、I区は遺跡の中で北西部に位置し、I-3号溝は弥生時代後期前半に掘削され、後期後半に埋没した溝である。I-4号溝(中期中葉)を切っているために、一部中期の土器を含んでいる。I区では中期・後期後半・後期末の遺構が報告され、時期不詳のI-1号方形周溝が確認されたが、他に2つの方形周溝(墓?、中期)を想定できようか。

1は当センター和田龍介氏による3次元モデルの原寸大であり、最大長66mm、最大幅52mm、最大厚18mm、重量39.6gである。表面には発掘調査時などに出来たとと思われる剥離や摩滅した部分が確認される。板状の素材であり、裏面は中央がやや窪んでおり、中央下側に左上方向に延びる削痕が少し確認される。下側の角には自然の窪みが若干確認される。正面は少し突状に盛り上がっており、ガジリと思われる傷が多い。下面には乳白色の粉状の塊が確認される。土器は地点・層位毎に報告(福島ほか1988)されているが、琥珀には層位が記載されていないので、廃棄されたのは弥生後期前半～後半となろう。

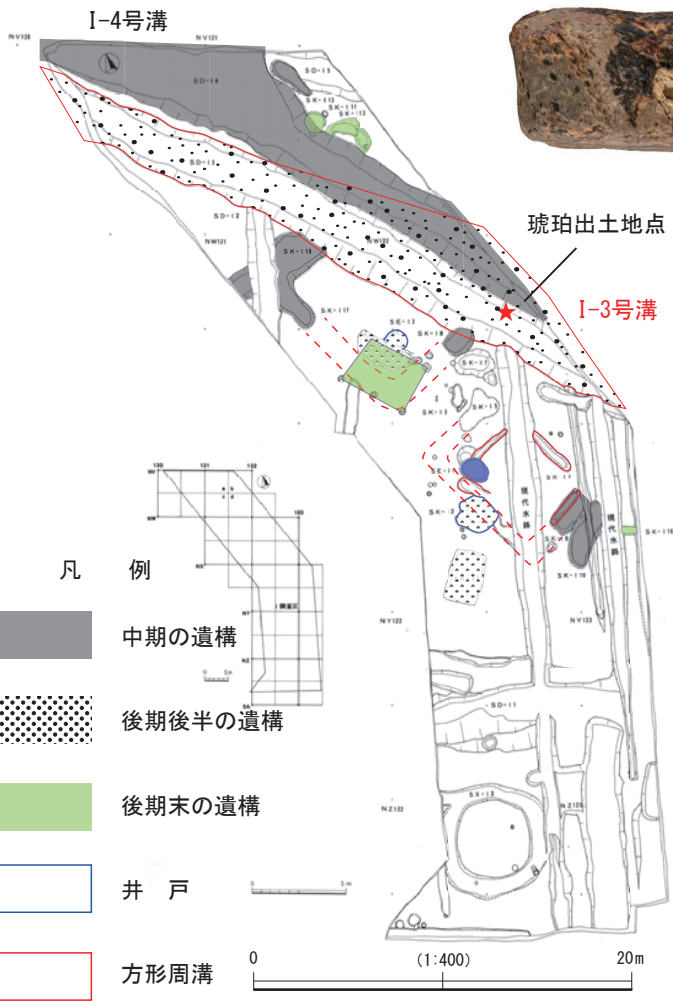
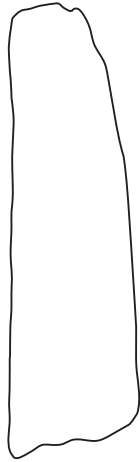
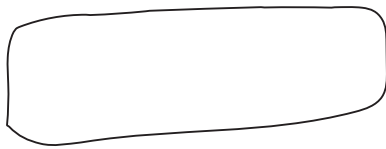
### 4. 石川県内の琥珀について

石川・富山県の琥珀を紹介(久田2012・2013)したが、ここでは石川県内の琥珀のみ紹介する。第6図2は七尾市三引遺跡96年F 2区B 0～-10cm出土であり、縄文時代前期と思われる。最大長35mm、最大幅57mm、最大厚30mm、重量27.6gである。上下の面と裏面右側には自然面を残すが、他の面には上下からの敲打によると思われる剥離がある。ガジリ痕は上面・正面・裏面に数か所極小さいものが確認される。3・4は能登町真脇遺跡出土である。3はI区第XI層前期後葉(高堀ほか1986)であり、長さ15mm、幅20mm、厚さ19mm、重量3.7gである。4は12次貼床住居調査区G 3グリッド第6層タチワリ⑨出土(高田ほか2022)であり、長さ25.6mm、幅24.8mm、厚さ13.8mm、重量4.28gである。時期は中期前葉後半～中期後半と思われる。5は金沢市中屋サワ遺跡SD40出土(後期末～晩期末、楠ほか2009)であり、長さ47mm、幅33mm、厚さ24mm、重量22gである。6は金沢市畝田西遺跡群大溝出土の勾玉である(安ほか2006)。古墳時代中・後期と思われ、長さ24mm、幅10mm、厚さ9mm、重量1.32gである。表面は光沢があり、赤色に発色している。紐穴は両側穿孔であり、紐擦れによる光沢を持ち、紐擦れにより上部に食い込んでいる。7～9は七尾市三室まどかけ2号墳玄室出土である(北野ほか2000)。7世紀第3四半期の古墳であり、3点の棗玉が出土しており、7・9は両側穿孔である。カラー写真では、9の孔下側には螺旋状の回転痕が確認され、孔の上側には錐先がずれた痕が3か所あるように見える。7は両端が丸くなっており、8の上面はやや平坦である。7は長さ15.7mm、幅14.8mm、厚さ11.1mm、重量1.45g、8は長さ10.1mm、幅12.9mm、厚さ10.0mm、重量1.00g、9は長さ17.7mm、幅9.7mm、厚さ9.4mm、重量0.70gである。

第11図10は、白山市東相川遺跡昭和62年度調査の北側1区P89出土(北野ほか1992)であり、第4号建物は7世紀前半代と思われる。表面は光沢があり、滑らかだが全体に小さな欠損・剥離がある。また、小さな剥片も存在する。長さ15.1mm、幅16.7mm、厚さ9.5mm、重量1.4gである。

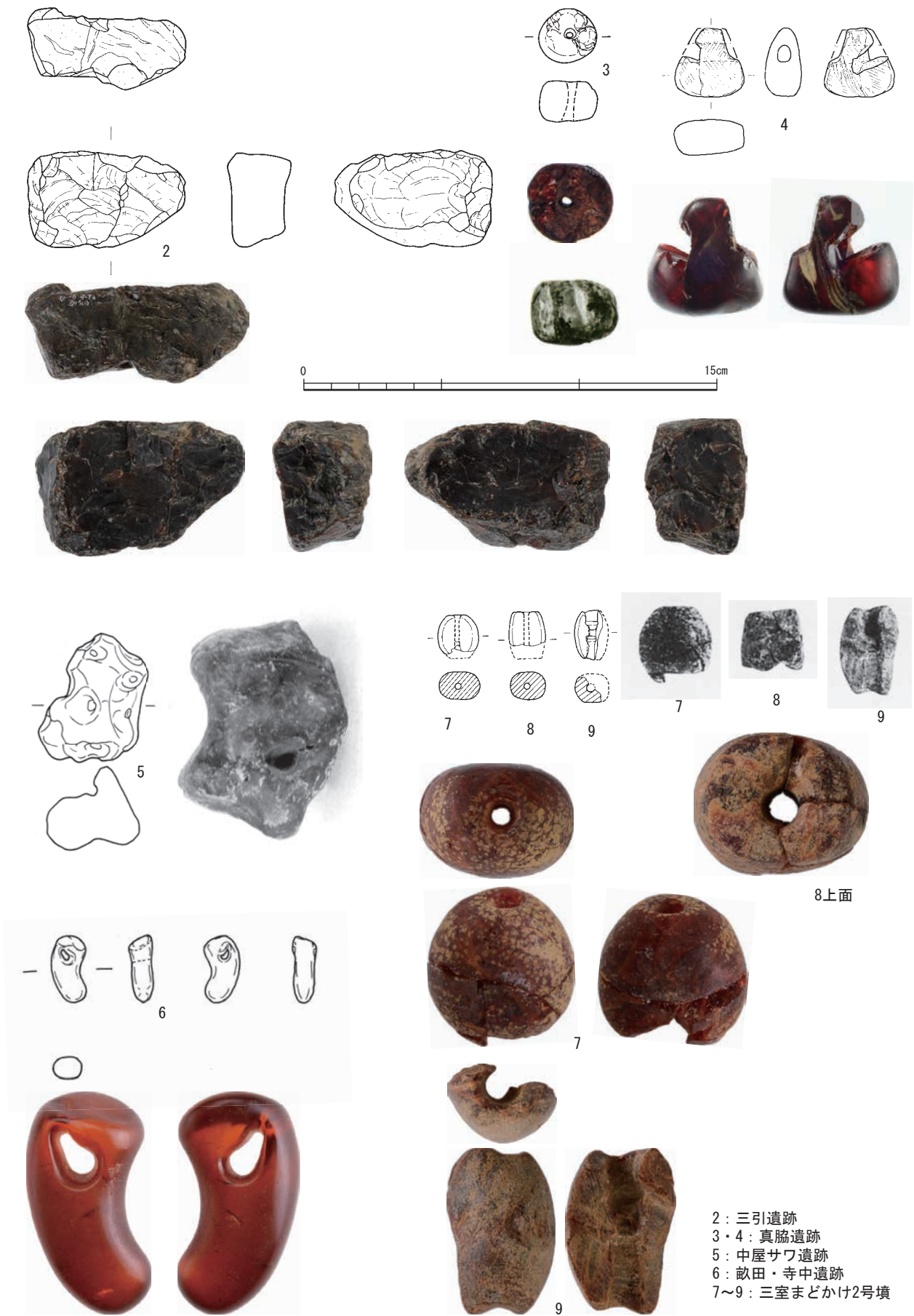
### 5. 吉崎・次場遺跡の翡翠について

吉崎・次場の翡翠は福島1987で資料化され、選別されていた資料(100数点)から伊藤雅文氏が新たに第170図1を資料化し、考察がなされた(伊藤1988第7図)。ここでは令和4年12月までに筆者等が確認した未選別資料(30数点)の中から3点を紹介する。ヒ031はI区1トレンチ出土であり、正面左側には



第5図 琥珀の3次元モデル(原寸)

第4図 I区全体図



- 2 : 三引遺跡
- 3・4 : 真脇遺跡
- 5 : 中屋サワ遺跡
- 6 : 畝田・寺中遺跡
- 7~9 : 三室まどかけ2号墳

第6図 石川県内出土の琥珀



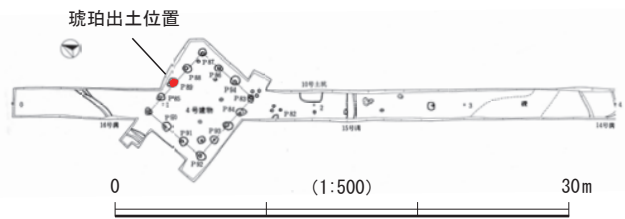
第7図 旧松任市の位置



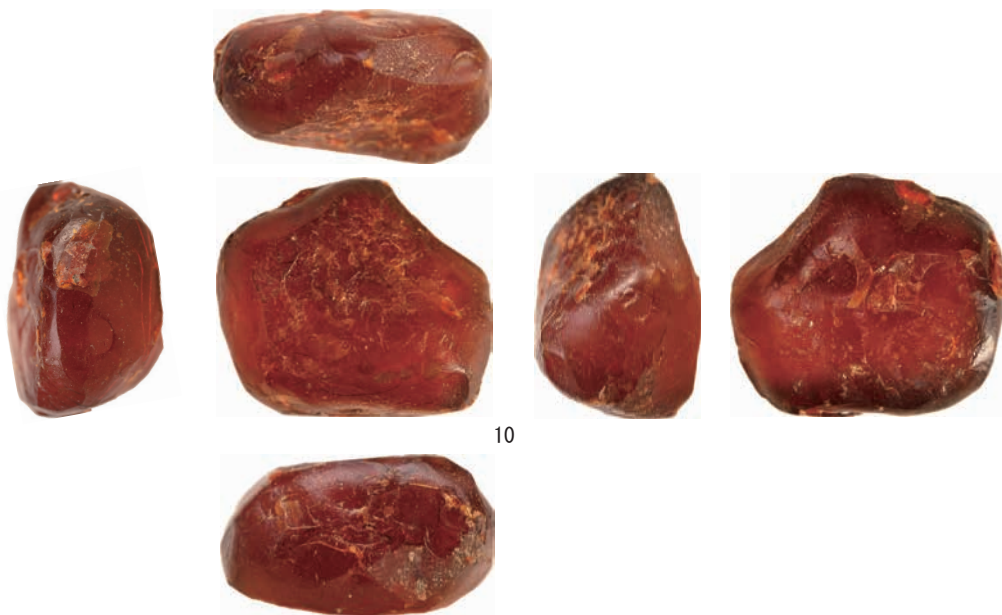
第8図 周辺の遺跡(1/5万)



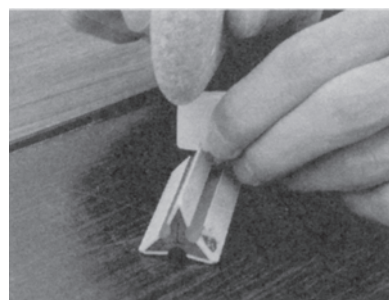
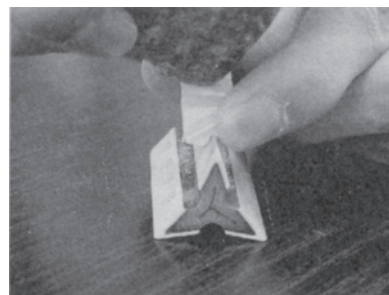
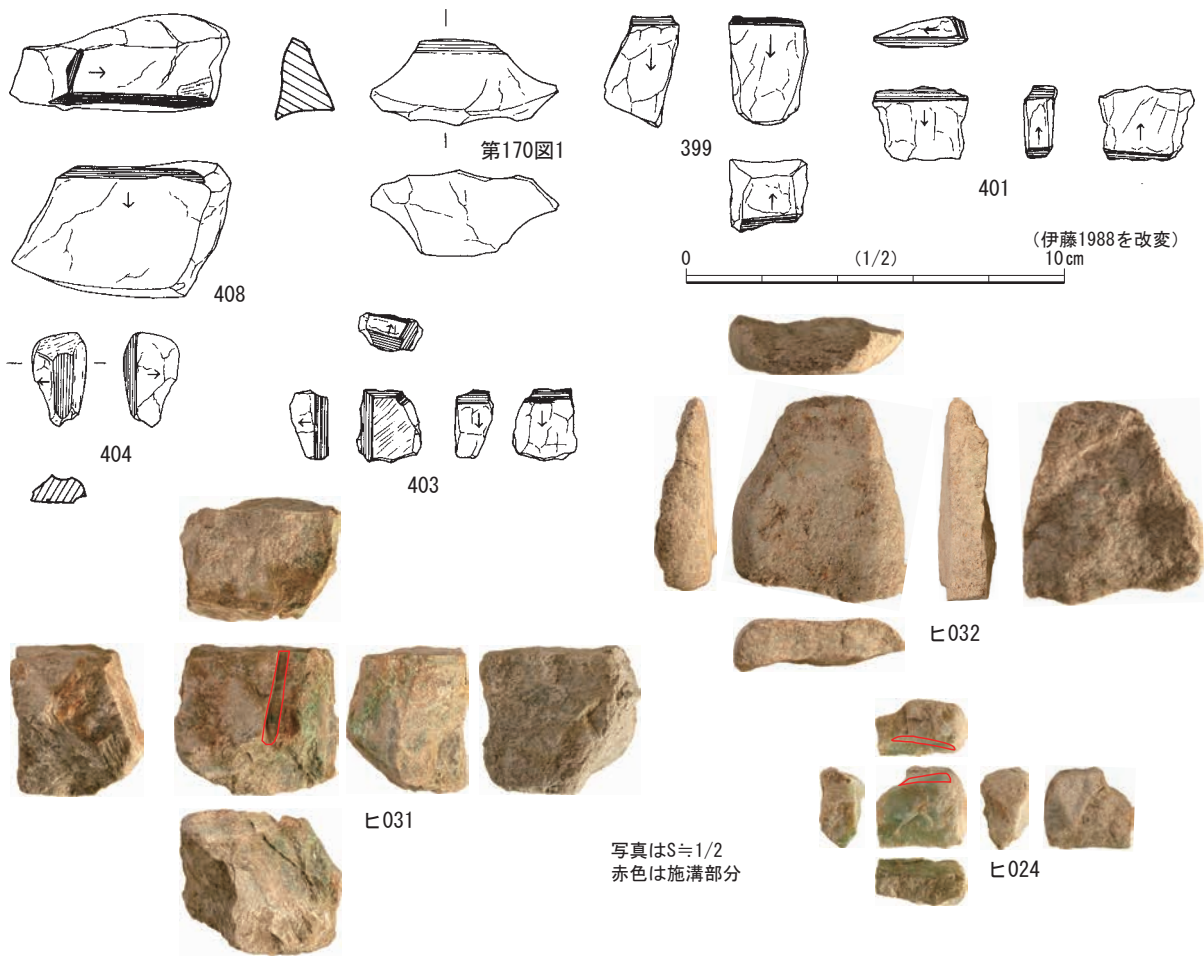
第9図 調査区配置図



第10図 調査区北側遺構図



第11図 東相川遺跡の琥珀



施溝分割実験 (馬場2006)

第12図 吉崎・次場遺跡の翡翠

一部自然面を持つ。全体に白濁して質は良くないが、正面の施溝より右側は緑の部分が多いのでそこを切り取るための施溝中に正面下側が欠損したと判断した。長さ37.8mm、幅39.9mm、厚さ31.7mm、重量85.6gである。ヒ024はL区NT120グリッド包含層出土である。上面・右面は自然面であり、白色の部分はやや質が良く、緑色は少し濃い部分もある。上面に施溝を持ち、中央左に打点がある。下面の稜には小さな剥離が多くあり、下側から数回の敲打が認められる(第12図左下)。下側からの数回の打撃痕を説明するには、第12図右下のように三角形の台座の突端を施溝部分にはめ込み、施溝面の反対面を直接打撃(馬場2006)したと判断した。正面左側上にある段は上下からの剥離が上手くいかなかったからと思われる。よって、緑部分を上手く



第13図 鳥取市青谷上寺地遺跡の琥珀産地推定図

分割出来なかったので廃棄されたのであろう。長さ28.5mm、幅26.9mm、厚さ15.0mm、重量20.3gである。

ヒ032はI区NV121aグリッド第1号溝(平安時代以降)出土であり、白色はやや質が良いが、緑色は薄くて少ない。正面・左面・右面は自然面であり、正面は研磨がなされているが、中央下側やや窪んでいるので研磨が及んでいない。扁平な礫を左面から打轄したが、薄くなりすぎて、廃棄したものと判断した。長さ52.5mm、幅45.1mm、厚さ14.5mm、重量52.2gである。

## おわりに

東日本の本州では、弥生時代後期の琥珀の類例は10か所程度(佐々木・千葉2006)、産地周辺の遺跡からの出土が多いようである。では西日本の状況を河合章行氏に問い合わせたところ、鳥取市青谷上寺地遺跡2点出土(河合ほか2016)していると教示を得た。2点は弥生後期後葉～古墳前期初頭の可能性が高く、中国地方の琥珀産地3か所と岐阜県瑞浪市の産地に同定(第一瀬戸内類累層群)され、中国山地の可能性を指摘(第13図水村・植田2016に加筆)されている。しかし北部九州の分析データがないことから、北部九州からのドリフトアンバー(漂着琥珀)の可能性も捨てきれないという。

吉崎・次場遺跡から、一番近い産地は瑞浪市だが、ほかに東日本では岩手県久慈市・千葉県銚子市・福島県いわき市・北海道石狩市と三笠市がある。当初、東日本の産地からの搬入を想定していたが、山陰と北陸の関係を考えると中国地方などの西日本の産地からもたらされた可能性も想定できよう。しかし、漂着琥珀の可能性は産地との距離が遠すぎることから、少ないと判断したい。

羽咋市吉崎・次場遺跡は、石川県立埋蔵文化財センターが昭和55～59年度にかけて県営ほ場整備事業に伴う発掘調査約5814m<sup>2</sup>を実施した。能登半島の弥生時代の拠点集落(安2001)であり、膨大な遺物が出土した中で約2600点が報告(福島1987・福島ほか1988)されている。注目される資料として、遠賀川式系土器(L字状口縁を含む久田2001)、栗林式系土器、分銅型土製品、生駒西麓産壺(久田2003)、天王山式系土器(久田2009)、土製鋳型外杵(林2000)、銅剣型磨製石剣、榎田型石斧(久田2004・2009)などがある。また、羽咋市教育委員会調査では縞状石材の磨製石剣・土製鋳型中子(未報告)、板状鉄斧(今井・林1999)な

どがあげられる。また、磨製石斧の製作工程復元(林2009)や建物の復元(久田2011)が行われたが、遺物については獣骨関係や翡翠関係などが未選別・未実測の状態で見られているのが確認された。そのなかで、令和4年12月に弥生時代の琥珀資料を、令和5年1月に白山市東相川遺跡の琥珀(7世紀代)を発見したので本稿で紹介した。今後琥珀の類例などの教示を各方面にお願いしたい。荒木智子、池田 拓、伊藤雅文、大屋道則、河合章行、栗島義明、下濱貴子、林 大智、西田昌弘、宮田 明、山崎嘉久氏の協力を得た。

## 参考文献

- 伊藤雅文 1988 「吉崎・次場遺跡出土土製品、玉類の考察」『吉崎・次場遺跡(2)』石川県立埋蔵文化財センター
- 今井淳一・林 大智 1999 「吉崎・次場遺跡出土の板状鉄斧について」『石川県埋蔵文化財情報第2号』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 河合章行ほか 2016 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告11 石器(2)』鳥取県埋蔵文化財センター
- 北野博司ほか 1992 『相川遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
- 北野博司ほか 2000 『三室福浦B遺跡・三室まどかけ遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 楠 正勝ほか 2009 『中屋サワ遺跡Ⅳ・下福増遺跡Ⅱ・横江荘遺跡Ⅱ』金沢市埋蔵文化財センター
- 佐々木和久・千葉啓蔵 2006 「琥珀玉類の生産と流通」『季刊考古学第94号特集弥生・古墳時代の玉文化』雄山閣
- 高田秀樹ほか 2002 『真脇遺跡Ⅱ』能登町教育委員会
- 高堀勝喜ほか 1986 『真脇遺跡』能都町教育委員会
- 馬場伸一郎 2006 「弥生管玉作りの施溝分割技術」『季刊考古学第94号特集弥生・古墳時代の玉文化』雄山閣
- 林 大智 2000 「羽咋市吉崎・次場遺跡出土の土製鋳型外枠について」『石川県埋蔵文化財情報第3号』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 林 大智 2009 「吉崎・次場遺跡の磨製石斧生産について」『石川考古学研究会々誌第52号』石川考古学研究会
- 久田正弘 2001 「北陸地方の木目沈線文と遠賀川式土器について」『石川県埋蔵文化財情報第6号』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘 2003 「弥生時代における影響関係について」『石川県埋蔵文化財情報第9号』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘 2004 「南加賀地方における弥生時代の一様相」『石川県埋蔵文化財情報第11号』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘 2009 「弥生時代の東日本系土器集成―栗林式土器・天王山式土器を中心に―」『石川考古学研究会々誌第52号』石川考古学研究会
- 久田正弘 2011 「弥生住居の想定復元2」『石川県埋蔵文化財情報第9号』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘 2012 「北陸地方の琥珀について―石川県・富山県の資料紹介―」『大境第31号』富山考古学会
- 久田正弘 2013 「富山県における弥生研究の一視点―資料調査の成果を踏まえて」『大境第32号』富山考古学会
- 福島正実 1987 『吉崎・次場遺跡(1)』石川県立埋蔵文化財センター
- 福島正実・伊藤雅文ほか 1988 『吉崎・次場遺跡(2)』石川県立埋蔵文化財センター
- 水村直人・植田直見 2016 「青谷上寺地遺跡出土の琥珀」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告11 石器(2)』鳥取県埋蔵文化財センター
- 安 英樹 2001 「北陸における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報第6号』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 安 英樹ほか 2006 『畝田西遺跡群Ⅳ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

---

---

石川県埋蔵文化財情報

第 48 号

発行日 2023（令和5）年3月29日

発行 公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1  
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731  
URL <https://www.ishikawa-maibun.jp>  
E-mail address [daihyou@ishikawa-maibun.or.jp](mailto:daihyou@ishikawa-maibun.or.jp)

---

---

印刷 前田印刷(株)

©（公財）石川県埋蔵文化財センター

